

私のおすすめ本

Caroline Hutchinson 専任講師

英語

Mindset: The New Psychology of Success, by Carol S Dweck

マインドセット — 「やればできる！」の研究 キャロル・S・ドゥエック著

草思社 2016年

大きな成功を収めた人を見て、その成功の原因は何だと考えますか？生まれつき才能があるからだと思われるかもしれませんが、懸命に努力をして経験を積むことも成功には欠かせません。本書では心理学の教授である著者が成功と失敗の要因と意味を考察し、成功につながるマインドセット（考え方）を解説しています。

大まかにですがマインドセットは二極に分かれると言えるでしょう。「硬直マインドセット」を持つ人は、自分の能力は固定的で努力しても変わらないと考えます。成長は見込めないと思込み、努力をして技能を高めるよりも他人から高く評価されることを好みます。失敗をする、低く評価されるということは自身の人間的価値への攻撃として受け取るため、それらを極端に恐れます。

「成長マインドセット」は、「努力すれば基礎的能力も伸ばすことができる」という信念に基づいたマインドセットです。このマインドセットを持つ人は、「失敗は成功の元」と考え、チャレンジ精神旺盛でモチベーションを長い期間維持することができます。

私はどちらのマインドセットの持ち主かを考えさせられました。結論としてはその二つの中間に位置し、場面に応じて考え方が変わることもあります。しかし若いころは「知らない」と言うときには恥ずかしく感じていたので、ある程度失敗を恐れていたのでしょう。日本に来てからは日本語でコミュニケーションを図ろうと努力をしては毎日失敗を繰り返し、子供に戻ったような気分を味わいました。日常会話が思うようにできず、しょっちゅういら立っては諦めようと考えたこともありましたが、時間をかけて確実に日本語力を伸ばすことができました。

私は人間の脳は素晴らしい学習機械だと信じています。「やればできる！」は空虚に聞こえるかもしれませんが、結局のところ、やってみなければ分からないのです。

Collapse: How Societies Choose to Succeed or Fail, by Jared Diamond

文明崩壊：滅亡と存続の命運を分けるもの ジャレド・ダイヤモンド著

草思社 2012年

現代の先進国に生まれた我々は幸運であり、生存のために全力を尽くす必要などないかのように思われます。過去を知る手掛かりとして謎めいた遺跡をテレビなどでは紹介していますが、近代社会も過去の社会と同様に滅亡する可能性があるなど誰も想像できないでしょう。しかし実際に人々が気候変動の脅威に怯えながら暮らしている世界では、危機標識を常に認識していなければなりません。

歴史学という分野は人名や故事の発生日時などを丸暗記すればよいというイメージを持つ人が少なくないでしょう。しかし人々の過去の行動とそれによって生じた結果をつぶさに分析すれば、現代社会が抱える問題解決の糸口を見出すことも可能です。哲学者のサンタヤナの言葉を借りれば、「過去を忘れる者は、同じ過ちを繰り返すもの」だからです。

著者のダイヤモンドは実例を挙げながら、環境破壊、気候変動、隣国に存在する敵対集団、貿易相手の不在、そしてあらゆる問題に対する不十分な社会的対応という、社会の崩壊の遠因と考えられる五つの事象を述べています。最初の四事象は社会によって異なりますが、対応はどのようなケースにおいても極めて重要です。肯定的な見方をすれば、長期的な計画と柔軟な考え方を持つ社会は問題を克服できるとダイヤモンドは主張します。

現代のルワンダやハイチの情勢からグリーンランドに入植したバイキングやイースター島の謎まで、これまで詳しく知られていなかった興味深い実例を本書では紹介しています。滅亡を防いだ森林の管理制度の例として、徳川時代の日本にも触れています。異説が存在するものもあるため本書に対する批判もありますが、世界史を広い視点で眺める機会を提供してくれる作品として価値があると思います。

Unbeaten Tracks in Japan, by Isabella Bird

日本奥地紀行 イザベラ・バード著

平凡社 2000年

ここ数年外国人観光客が大幅に増加しており、「諸外国から見た日本」に多くの関心が集まっています。では、近代日本ではなく明治維新直後の日本はどのように見られていたのでしょうか？本書は洞察に富んだ日本の旅行記です。

著者のイザベラ・バードは英国出身で、生来病気がちでした。医者 の指示に従い屋外スポーツを楽しみ、成人すると勇気を振り絞って米国、ハワイ、豪州、インド、チベット、トルコ、中国、韓国など多くの国を訪れました。また旅をすることで病気の症状が和らいだ ようです。旅行家として知られるようになったバードは20冊以上の旅行記を執筆し、そのうちの 一冊が「日本奥地紀行」です。

女性が一人で旅をするなどあり得ない時代でしたが、バードは米国のコロラド州を訪れた 際に片目の無法者と親しくなるなど、非常に冒険好きでした。日本への旅を計画したとき には、当時「未開の地」であった東北と北海道を迷わず日程に組み入れました。明治時代の 未開発の日本と北海道のアイヌ民族などの貴重な記録となる旅行記だと思います。

「私は見たままの真実を書いている」というバードの物言いはかなりぎっくばらんで、日 本人は不快に感じるかもしれません。日本の素晴らしい景色や温泉、日本人のおもてなし など心動かされたようですが、反面、不潔な場所や貧しい人々の困難などについては かなり否定的に述べています。

一方的な見方で人種差別的な発言もしていますが、見聞きしたものを赤裸々に語るバード の言葉に偽りはないと言えるでしょう。意志の強い外国人女性旅行者の目を通して明治 11年の日本を経験できる、非常に興味深い記録です。